

食べる喜びをもう一度

「やっぱりまだ口からご飯食いたいな・・・」

この患者さんの強い思いがきっかけとなり

医療チームが一丸となって看護・ケアを実施できたと思う事例があります。

その患者さんは軽度の認知症があり、ふらつきがあるものの一人で移動できる方でしたが栄養面は胃ろうを造設し経管栄養を行っていました。注入の際には、食堂の隣にあるホールでテレビを見ながら行っていました。目の端に映る他の方の食事風景を大変気にされていました。

そんな患者さんに、もう一度口から食べる楽しみを実現してもらいたいという思いが強くなった私は、思い切ってカンファレンスでスタッフみんなと話し合う機会を何度か設けました。医師の指示をもらい言語療法士に評価をしてもらったところ、お楽しみ程度のゼリーから開始が可能とのことでした。今度はリハビリスタッフ、栄養士と連携を図り、摂取前のマッサージや姿勢の工夫、食形態や食器の検討を試み、ソーシャルワーカーを通して家族にも了解を得ながら進めていきました。



そしてついに、患者さんが自力でスプーンを口に運び、リンゴゼリーを一口。ゼリーを食べた瞬間のクシャッとした笑顔・・・あの光景は今でも忘れられません。その時は思わず、他のスタッフ達と手をたたき合って喜びました。その後患者さんはゼリー1個から品数が増え、ミキサー食をむせはあるものの摂取できるようになりました。最終的には昼食時の経管栄養を中止し、経口での食事へ移行することができました。

その人らしい生活に近づけるための援助とは何かを考えた時、これは絶対無理なのではないかと思うことも、各専門分野からの視点で多角的な意見を聞き、話し合い、協力し合うことで実現できることもあるということを強く実感しました。今でもあの患者さんの満足気な笑顔は私の看護の原点にあります。これからも患者さんのとびっきりの笑顔を引き出せるような関わり、チーム医療を提供していけるように取り組んでいきたいと思います。

